

幻想郷最強の兄妹

黒閃

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

目が覚めると、見知らぬ林の中にいた恭弥は、両親を亡くした少女と出会う。

これは、血の繋がらない兄と妹の物語です。

プロローグ

目

次

1

プロローグ

「あれ? ここは…」

目を覚ますと、そこは見知らぬ林の中だつた。

周りには木しかなく、薄暗いためか先が見えない。

つい先ほどまでは、林の中歩いていたはずなのだが…

「…って、もともと林の中歩いてたんだから、林の中は当然か」
時間を確かめようと時計を見ると、針が止まっている。

どうやら壊れているようだ。

「ん~時間もわからぬんじゃ、どうしようもな…」

そのとき誰かの声が聞こえた気がした。

「?? 気のせいか」

するとまた声が聞こえた。

今度は確かに聞こえた。

声がした方へ歩いて行くと、ガサガサと音がしたとたんに勢いよく少女が飛び出してきた。

「おわっ!!」

「きやつ!!」

そのまま少女はぶつかり、尻もちをついた。

「だ、大丈夫ですか?」

少女は、はつ!!と我にかえると「助けてください!!」と後ろに隠れた。

「え? どういう…」

その答えはすぐに判明した。

少女が走ってきた方から2メートルはありそうな化け物が出てきた。

正直なことを言うと、その化け物ものすごくきしょい。

「…? ダレダ、キサマハ」

「うおっ!!喋った」

化け物がすごく低い声で話し始めた。

「…ダレデモイイガ、ウシロノニンゲンヲワタセ」

後ろの少女に目をやると、今にも泣き出しそうに震えている。

これを前によく泣いてないもんだ。

それにこの子かなりの美少女だし、あれに渡すのはちょっとなう。とか考えながら、とりあえず化け物に返答する。

「…嫌だといつたら?」

「キサマモロトモヤツザキニシテヤル!!」

そういう化け物が飛びかかってきた。

少女を少し離して、優しく話しかける。

「大丈夫だから。5秒間目を閉じといて」

少女は頷き目を閉じる。

それを確認すると、化け物に向き直り対峙する。

「さて、いつちよやりますか」

少女が彼と出会う数分前のこと。

少女は両親と畑に来ていた。

いつものように野菜を収穫して、両親と家に帰る途中事件は起きた。

帰り道である林の中を歩いていると、突然2メートルはありそうな化け物があらわれた。

「…ウマソウナニオイガスルナ」

そういうと、化け物は少女の母親を頭から食べた。

「お母さん!!」

父親は一瞬の出来事で呆然とするもすぐさま我に返り、少女に叫ぶ。

「早くにげる!!」「でも、でもお父さんが…」

「俺のことはいいから早く…」

そのとき父親も、化け物に食べられた。

「ツギハオマエダナ…」

化け物が少女に近づいてくる。

少女は父親に、言われた通りにその場から逃げた。

「ニガサンゾ…」

少女はとにかく逃げた。

両親のことを考えながらもひたすら逃げた。

「誰か助けてください!!」

そう叫ぶもこんな時間に林の中を歩いている人がいるはずもなく、辺りは静まりかえっている。

少女はもう一度叫ぶが、返事はない。化け物はもうすぐそこまで来ていた。

「このままじゃ… 食べられ…」

そう言い泣きそうになつたとき、何かにぶつかつた。

「おわっ!!」

「きやっ!!」

ぶつかつた勢いで尻もちをついた。

「だ、大丈夫ですか？」

その声を聞いて少女は我に返り、彼にすがりついた。

「助けてください!!」

そう言い、彼の後ろに隠れた。

「もう大丈夫だよ」

少女に声をかけた。

すると少女は恐る恐る目を開けた。

目の前に広がるのは先ほどの化け物の原型がないほど、切り刻まれた化け物だった。

彼の手には一振りの刀が握られている。

「あ、あの。ありがとうございます」

少女は涙目になりながら彼にお礼をいった。

「どういたしまして。それより、どうしてこんな時間にこんな林の中にいたの？」

すると少女は先ほどのことを思いだし、泣き始めた。

「…ぐすっ;」

「少しほ落ち着いた?」

まだ、涙目ながらも少女は頷いた。

少女は途切れ途切れあつたことを話し始めた。

「それは辛かつたね…」

彼は少女の頭を撫でる。

少女も大分落ち着いたのか、彼に話しかける。

「…ぐすっ…助けてくれてありがとうございます;」

少女は彼にもう一度お礼をいった。

「どういたしまして。それで君はこれからどうするの?」

まあ、家に帰るだろうなとわかつてはいたが…

「…お家に帰ります」

そう言い少女は立ち上がろうとしたが、うまく立ち上がれない。

どうやら緊張が解けたせいみたいだ。

「…あ、あれ?」

なんどか試みてるが、うまく立ち上がれずその度に尻もちをついている。

そんな少女を彼は抱き抱える。

「危ないし、家までおくるよ」

少女は驚きながらも、甘える事にした。